

現代史の中の司馬遷

現代の私たちは、司馬遷を二人に分解して理解している。『史記』の——つまり歴史の——語り手としての司馬遷と、発憤著書説を述べた情念の人としての司馬遷と、である。

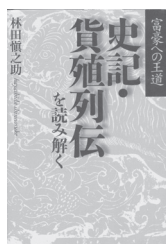
歴史の語り手としての司馬遷を、私たちは通常ほとんど意識しない。『史記』において私たちが見ているのは歴史という舞台であり、舞台の袖で語る語り手は無に等しい。歴史の語り手としての司馬遷は、時にその語り——『史記』の文章表現——において問題となるだけだ。一方、司馬遷が肉体と精神をもった人間としてとりあげられるのは、発憤著書説を述べた人物としてである。「周文王の『周易』、孔子の『春秋』などの著作は、それぞれの不幸によって胸に憤懣をいだい

安藤 信廣

た著者たちが発憤（憤りを発す）して著したものなのだ——というのが、司馬遷の発憤著書説である。ここでは、李陵の事件によって宮刑を受け、それに耐えて文章を著した異様な情念の持ちぬしとして、司馬遷は突出する。

要するに私たちは、表現と情念の二項によって司馬遷を理解しているのである。だがそこには、司馬遷の現実認識への注意が欠けている。司馬遷が優れた歴史家である以上、同時代の現実に対する深い認識を持っていただろう。それがどのようなものだったかということとは、司馬遷という個人、『史記』という歴史書の理解のために重大な課題であるはずだ。にもかかわらず現代の私たちは、司馬遷の同時代認識を問題にしてこな

林田愼之助著
富豪への王道 史記・貨殖列伝
を読み解く



四六判 288頁
講談社 [1680円]

かった。司馬遷を二人に分解し、情念と表現の二項で理解することに慣れてしまったからだ。

林田愼之介『富豪への王道——史記・貨殖列伝を読み解く』は、私たちの司馬遷像を変える力を持っている。司馬遷を情念と表現の二項で理解していた私たちの対して、本書は司馬遷の認識——漢の武帝の治世に対する認識——を問いなおしている。司馬遷が歴史家として立つにあたって心にいだいていた同時代認識を、『史記』巻二十九「貨殖列伝」を主なものとして、本書は鮮明にえがきだした。いわば「貨殖列伝」を支点にして司馬遷と『史記』の像を変えたのだ。

中国年鑑 2008

◎5月下旬刊行予定◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5 判 約 500 頁

価格: 18,900 円(税込)

◆特集

試練にさらされる胡錦濤政権

1. 「和諧社会」建設へ向かう胡錦濤指導部 金子 秀敏
2. 「市場手段と行政関与の間で—新陣容による経済政策」

浜 勝彦

3. 「「和諧世界」掲げ大国外交を推進」 塚越 敏彦

4. 「安心と信頼の回復を目指す食品安全政策」 森 路未央

◆動向

政治、外交、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、香港、マカオ、台湾、国民経済、財政、金融、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、IT 産業、対外経済、労働、暮らし、医療・医学、環境問題、教育、スポーツ、文化、宗教

◆資料

統計公報、主要文献・人事、現代中国史年表ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

(社)中国研究所

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-nenkan@tcn-catv.ne.jp

URL: http://www.soc.nii.ac.jp/ica/

第四章

『史記』『貨殖列伝』の素封家た

随

「貨殖列伝」こそ『史記』の真

第三章

後世史家の批判を越えて迫る司

第二章

空前絶後の同時代史として—

第一章

発憤著書と司馬遷—なぜ司馬

遷を浮かび上がらせたのである。

本書は、次のように構成されている。

第五章

「貨殖列伝」における地勢学的経済論—風土と歴史の影響力を見抜いた司馬遷

第六章

古代の経済思想と「貨殖列伝」

第七章

権力者・武帝の肖像—始皇帝

第八章

うち続く匈奴征討のつけ—財政

第九章

権力におもねり民衆を収奪する

酷吏の登場—司馬遷が記録した役人達の驚くべき行状

第一〇章

塩鉄の国有化と重税の圧迫—

民衆を苦しめた武帝時代の悪法

第一章

経済官僚を批判した富翁の無欲—武帝を感心させた素封

家・卜式の善行

本書は「貨殖列伝」を検討して、そこに司馬遷の、「上からの規制を極度にきらう自由な経済思想」(二二頁)が示されている、と指摘する。「貨殖列伝」は、自己の才覚で自由な経済活動をおこない財を成した古今の人々、いわゆる素封家を記録したものであるが、彼らのすがたを通して「国家権力が民間の経済活動に介入し、統制を強化する(武帝の)抑商

政策」(二二頁)を批判したのだと、本書はとらえている。武帝の時代は、対外戦争のために経済的矛盾が深刻化し、それをのりきるために経済統制と専制政治が強制された時代であり、司馬遷はそれと正面から対決したのだ、というのである。

第一章では、宮刑の屈辱を受けた司馬遷にとって『史記』を著すことは「起死回生を期した精神のいとなみ」(二九頁)だっただけでなく、「天下人(武帝)への大いなる批判」(二八頁)を含んでいた、ことを指摘する。第二章・第三章は、その批判が、国家にとって「危険な現実批判」(三九頁)だったことを述べる。「貨殖列伝」だけでなく、「遊俠列伝」も、「遊俠の徒の法網侵犯の行為のなかに、儒教理念の顕在を認めねばならぬ時代」(五九頁)への批判にほかならない。第四章から第六章までは、「貨殖列伝」の主役である素封家たちの、自由で同時に節度ある活躍をえがき、古代哲学の経済思想にくらべて「貨殖列伝」にこめられた司馬遷の自由経済論が先見性にみちている

ことを示している。第七章から第九章までは、武帝の一見華やかな治世が、実際には連年の匈奴征討などのために財政破綻に陥っていたことを具体的に示す。それをのりきるためにとられた政策が、重税であり、国家による日常的市場介入としての平準法であり、売官・売爵であり、金銭による免罪制であり、これらの国家統制に抵抗するものを取りしめる過酷な法令であり、密告制だった。そのために酷吏と呼ばれる残忍な官僚群が現れたことを「酷吏列伝」は記録している。本書はその事態を「武帝の後半期になると、酷吏が公然と活躍し、それを批判する者は抹殺される暗黒時代でもあった」(二二七頁)ととらえている。第一〇章・第十一章は、財政の急迫のために武帝の政府がついに塩と鉄の専売制にふみきった経緯をえがきます。同時に、それを批判しつつしかも武帝を支えようとした素封家のすがたをえがきだし、専制君主の寒々しい内面と素封家の人格的高さとの対比がおこなわれ、全体が結ばれている。

ゴルトシャイトは、予算が国家の「あらゆる粉飾的イデオロギーを脱ぎすてた骨格」であると述べた。その言葉をふまえて、シユムペーターは「財政史の告げるところを聴くことのできるものは、他のどこでよりもはつきりと、そこに世界史の轟きを聴くのである」と主張した(「租税国家の危機」木村元一・小谷義次訳)。司馬遷は『史記』において、漢の武帝の国家の「あらゆる粉飾的イデオロギーを脱ぎすてた骨格」をつかみ出し、武帝の国家の財政的矛盾のなかに「世界史の轟き」を聴いていたのである。そして本書は、司馬遷のこの現実への冷厳な批判を、私たちの前に明らかにしたのだ。

司馬遷が武帝の経済統制政策に対抗して自由経済を主張したのであるならば、李陵事件を待たずに両者の衝突は必然だったということもできるだろう。そこに、武帝の時代の専制体制化への動きと、それに抗する司馬遷の自由の精神との切り結びが見えてくる。本書の提起する問題は、中国の思想史全体にさえかわり

かねない。

しかし、それだけではない。そこに止まらず、司馬遷の認識が私たちの現代に何をもたらすかという問題をも、本書は突き出してくる。それは、経済と倫理の問題である。

「貨殖列伝」に登場する素封家たちは、自己の才覚をたのむ自由を持っているが、その一方で厳しい倫理を持っていることに大きな特徴がある。彼らの活動を通じて、司馬遷は、経済活動は自由であるべきだと主張した。だが私たちの現在の認識では、自由な競争はしばしば独占に転化する。なるほど、利益を追うものは自由にその追求をなし得る。国家からの制約も受けるべきではない。利益追求は自然なことであり、人間の本性にねざしている。だが、現実の経済活動は一方に富の蓄積を生み、他方に貧困を生む。その極端な格差は、まさに今日の社会問題である。本書の「あとがき」は、二一世紀の「あくなき拝金主義者」(二七頁)をとりあげ、その「拝金主義者のアンモ

ラル」(同前)を批判した人として司馬遷をとらえかえす。だが、「司馬遷は単純なモラリストではない」(同前)ともいう。敷衍すれば、それはこういうことだろうか。

富への欲求は、しばしば富めるものの暴力に転化してしまう。自由な経済活動は、何ものからも自由であるから、倫理からの拘束も受けない。自由経済は倫理を排除する。しかし、だからこそ、富の追求は倫理を引き受けなければならぬ。「貨殖列伝」の素封家たちが単なる富者ではなく、倫理的存在でもあったことを再認識するべきだろう。利益追求が構造として倫理を排除するが故に、富を迫うものは自由な意思として倫理を引き受ける決断をしなければならないのである。

利益追求が地球環境さえ破壊しかねない今日、司馬遷と本書が現代に向かつて語ることは、重大だといわなくてはならない。(あんど・のぶひろ 東京女子大学)

中国関係専門店	東方書店	【店舗のご案内】	ご来店をお待ちしております
---------	-------------	-----------------	---------------

東京店舗

地下鉄山手線 ● 有楽町駅 徒歩1分
JR御茶ノ水駅 ● 御茶の水橋上り徒歩10分

〒101-0051 東京都千代田区千代田神保町1-3
TEL:03-3294-1001 / FAX:03-3294-1003
営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）

大阪店舗

地下鉄御堂筋線 ● 5号出口より徒歩5分（JR新大塚駅より地下鉄御堂筋線で2駅目）
〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1
TEL:06-6337-4760 / FAX:06-6337-4762
営業時間：10時～18時/土日祭休